

発行人：NPO 法人市民科学研究室 【会員を募集しています。電話もしくはホームページ「募集・相談窓口」にて受け付けています。】

●〒113-0033 東京都文京区本郷6-18-1 ●Tel&Fax：03-3816-0574 ●HP：http://www.csij.org/ ●e-mail：renraku@csij.org

■本誌は市民科学研究室のホームページと併せて読んでいただくための月刊のニュースレターです（本体は無料）

今月のテーマ

科学技術予測の市民的活用

市民研のワークショップ活動から 上田昌文

[サイエンスアゴラ 2009](#) の会期が終った。私はその中で [3つの企画](#) に関わったこともあって、この間サイエンスコミュニケーションについて考えさせられることが多かった。市民科学研究室ではこの9月17日にも [「科学コミュニケーションに何が求められているか ～科学への共感と批判のはざままで～」](#) と題した市民科学講座を開いたが、そこでも20人ほどの参加者とともに「サイエンスコミュニケーションとはいかなる活動なのか、何を指すものなのか」を熱心に論じた。そこでの議論の詳細は次号に譲るとして、ここでは、市民科学研究室がここ数年にわたる取組み一つとしてやってきた、「市民参加型の技術の未来予測作業」とでもいうべきものの中身とそうしたアプローチの意義を述べてみたい。私は、このアプローチは、科学技術の動向に対して市民がいかにして理解を深めるかという点や、特定の問題領域において必要とされる専門家と市民の対話を引出すという局面において、相当有効な方法となり得るものだと考えている。

よく知られた代表的な技術予測調査としては、科学技術政策研究所（NISTEP）が5年ごとにやっている、いわゆる [デルフアイ調査](#) というのがある（文部科学省『[2035年の科学技術](#)』）。これが最も規模が大きくて、専門家をたくさん使った調査になっている。科学技術振興機構（JST）がつくっている [「パナール科学館」の「未来技術年表」](#) というのがあるが、これはNISTEPのこの報告書をもとにつくられた一般向けの年表だというふうに理解することができる。それからもう一つ、博報堂がやっている生活総合研究所の [「未来年表」](#) というのも大変よくできていて、何年にこういう技術の出現が予想される、こういうことが起こるだろうということを、NISTEPの資料も含めて非常にたくさんの資料から、年代を並べて、ジャンルに分けて検索できるようになっている。

こういうものは誰がどういうふうに考えてつくったのかというあたりは、もちろんこれらのサイトを見れば大体わかるのだけれど、これらは一体どういうふうに使われているのだろうか。基本的には科学技術政策に生かすということが基本の狙いだろうが、私たちのようなNPOからすると、「何らかの形で市民とか生活者がこういう未来技術予測みたいなことにかかわる方法がないのか」「かかわることで、何かいいことが生まれてくるのではないのか」——そういう観点があると思う。

そこでの問題は、私が思うに大きく三つある。一つは、技術を将来的に予測するというときには、まず科学技術の専門家にたくさんインタビューをして、この技術は将来的にどうなりますかということを聞くわけだが、科学技術に内在する展開要因は科学者自身はある程度述べるができるが、外在的な要因というものを述べることは普通できない。そこで、社会科学の専門家に頼っているいろいろ考えてもらったりヒントをもらった

りするというので大体構成していく。ところが、こうしたやり方をとると、市民・生活者の価値観とか声とか希望というのがどういところから入り、反映する余地があるのだろうか、という方法的な問題がある。

2番目に、技術予測の前提となる社会像とか社会の動向というものは、社会全体での価値観と関わる部分が必ずあるので、そういうものは、生活者抜きには本来は語れないはずだろう。したがって、そもそも生活者と科学技術というのはどういうふうにかかわっているんだろうとか、将来の社会像と生活者の価値のかかわりというのはどういうふうになっているんだろうかという、あたりをもっと理論的に究明していかなければ本来はいけないはずだ。ところが、そういう関係性というものをすっとばした形で予測作業が進んでいるという問題があるように思う。

それから、一方生活者の側にしてみれば、生活者というのはいろいろな科学技術が生活に入り込んできているから、ある意味では専門領域によって分けられないような総合性みたいなものを持っている。そういうものと科学技術の全体像というのを重ねてみることによって、いろいろわかってくること、言及しなければならないことがあると思う。

したがって、「生活者自身が科学技術の全体像に関心をどういうふうに持てるか」という問題と、「生活者自身で科学技術の予測の作業に何らかの形で加わってることができないだろうか」という2点が重要になってくるのではないかな。

私たちは当初から今言ったような問題意識があったわけではないのだが、今までを振り返ってみると、次の4種類がまさにこうした科学技術予測作業に関わる活動だったことがわかる。

一つは理論的な作業ということで、生活者と科学技術がどういにかかわりを持っているかということをも可能な限り系統的に調べるということをも JST 社会技術研究開発センターの助成を受けた研究 [「生活者の視点に立った科学知の編集と実践的活用」](#) の中でやった。

次に、科学技術の全体像を意識した2種類のワークショップを実施してきた。一つは、ワークショップの「[百年の愚行](#)」というもので、もう一つは「[携帯電話政策論争!](#)」というものだ。

さらに、生活者自身が科学技術の将来どうなるかということの予測作業に加わってみるというタイプのワークショップもやった。一つが「[21世紀の預言](#)」というものと、もう一つがつい最近開発した「[科学技術の地平線～市民からのイノベーション発案](#)」というものだ。

そして、技術予測データを踏まえて、専門家と市民との実際の対話型のシナリオ構築作業というのを織り込んだウェブのシステムというものも作った。「[ナノテク未来地図](#)」と私たちが呼んでいるものがそれにあたる。

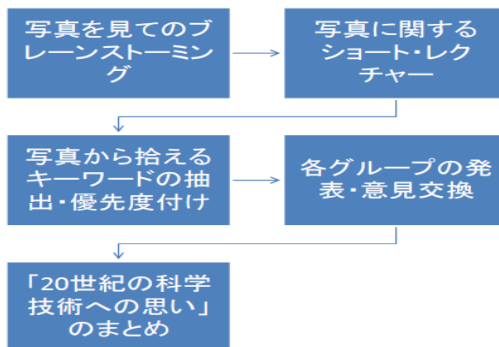
次ページの『今月の要点』でそれらを詳しく取上げてみる。

市民科学研究室のアプローチ～6つの試み

- 1) “生活者と科学技術の関わり”の基礎的な理論化作業
・JST社会技術助成「生活者の視点に立った科学知の編集と実践的活」(2005年～2007年)
- 2) 「科学技術の全体像」を意識した2種類のワークショップ
・ワークショップ「百年の愚行」(2002年～)
・ワークショップ「携帯電話政策論争！」(2005年～)
- 3) 生活者自身による「科学技術予測」作業
・ワークショップ「21世紀の預言」(2001年～)
・ワークショップ「科学技術の地平線」(2008年～)
- 4) 技術予測データをふまえた専門家と市民の対話型シナリオ構築作業
・ウェブを用いた「ナノテク未来地図」(2008年～)

今月の
要点

ワークショップ「百年の愚行」(75分)の流れ



1 ワークショップ「百年の愚行」

一番最初に開発したワークショップは、2002年に出された本で『百年の愚行』という写真集(発行元: Think the Earth プロジェクト)を使ったものだ。これは、20世紀の、言ってみれば人間がなしてきた巨大な愚かな行いというものを一枚の写真で一つの事象を映し出していくということで作られた写真集だ。例えば、広島・長崎の原爆があり、愚行と言えるかどうかは措くとして、クローン羊のドリーがいて、その横にはクローン稲がある、という具合になっている。例えば、参加者にこの中の一枚を見せると、この一枚だけでは何なのかよくわからない。あるいは、ひょっとしたらこの写真が何であるか、パッと見抜ける人もいるかもしれない。低レベル放射性廃棄物の処分場の写真や、ベトナムで枯れ葉剤を空中から散布しているなどはわかる人もいるだろうが、狂牛病にかかわる肉骨粉が入った、北海道のある倉庫に積み上げられた飼料の写真や、対戦車地雷の写真など、一見ではわからないものもたくさんある。



写真集『百年の愚行』
(Think the Earthプロジェクト 2002)



やり方は、10数人から20数人くらいの人を集めて、グループに分けて、写真をどんどん見せていく。ブレインストーミングをしてもらって、この写真が一体何なのかということを考えてもらう。十分議論をした後に、写真に関して短い説明をこちらからする。そして、また各班で写真から拾えるキーワードを抽出してもらい、「自分にとっての20世紀の科学技術を語るときに、この言葉は落とせない」というものを抜き出してもらう。それを班の中で、自分にとっては何が重要か優先度をつけてもらって発表する。そして、最終的には個人が20世紀の科学技術への思いをまとめる。

2 ワークショップ「携帯電話政策論争！」

もう一つは、これはいろいろな大学で実施したもので「携帯電話政策論争！」というワークショップだ。市民科学研究室は電磁波問題のことで携帯電話のことで相当詳しく調べているので、そのことを生かしている。いうまでもなく、携帯というのはただ単に電話というふうにとらえるのは間違っている。社会とのかかわりの非常に深い、多面的な存在なので、そのことに何とかうまく意識を喚起するワークショップができないかということで考えた。私たちは「携帯電話を考える10の視点」を整理した。

携帯電話を考える10の視点

- (1) 産業成長・経済効果
- (2) 利便性の向上(ユビキタス社会の中核技術)
- (3) 福祉(コミュニケーションのバリアフリー)
- (4) 公共性との兼ね合い
(公共空間の私物化、固定電話の減少)
- (5) 犯罪・事故・安全(電子機器の誤作動などを含む)
- (6) 通話代による家計圧迫
- (7) 健康影響
- (8) 環境負荷(廃棄物問題、希少金属資源など)
- (9) 若年層に特有の影響
(依存症、有害サイトアクセス、ネット犯罪、いじめ)
- (10) 基地局(住民合意不在の設置が生むトラブル)

それをどういうふうにするかというワークショップにするかという、今言った10の視点というの参加者に最初に解説する。それを頭に入れてもらった後に、それぞれのグループに経済産業省、環境省、厚生労働省、国土交通省、文部科学省、総務省の役人になってもらい、政策をつくってもらう。10個の問題があるけれども、それをそれぞれの省庁の立場から考えて、どういう政策を打ち出したら社会の問題をある程度解決できるかを考えてもらう。そのために、この10の視点を上から1、2、3、4層に分けて、優先順位づけをする。それぞれの省庁の人が前に出て発表して、「うちの省庁ではこれを優先した、なぜならば……」と説明をする。そうすると、他の省庁から異論が出てくる。そこで議論を交して、最終的に政策をまとめていく。通常、かなり活発なやりとりができ、時には相当奇抜な政策アイデアが出てきたりもする。

4 ワークショップ「科学技術の地平線」

最後に紹介するワークショップは、去年のサイエンスアゴラ 2008 でやった一番新しい「科学技術の地平線～市民からのイノベーション発案」だ。これは、日本を救う、日本を元気にするこれからの技術を市民自身が大胆に発想するという目標にしている。そのための助走として、技術評価を丁寧に行ってみようという試みだ。

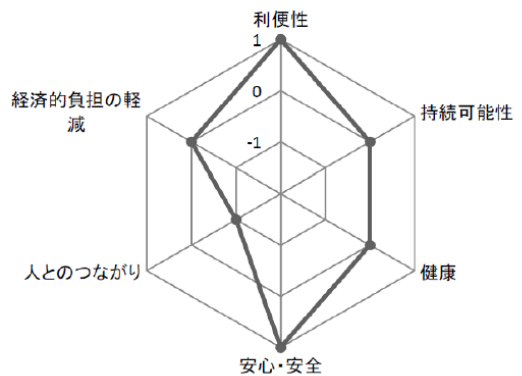
実施にあたってはまず前提となることを紹介する。「今の日本はどんな問題を抱えてしまっているのだろうか」ということを私たちなりに整理して提示する。これをいつもカードとして横に置いておく形になる。次に、これは先ほど述べた JST の「バーチャル科学館」に載っている「未来技術年表」の中に「[科学者たちが選んだ重要課題トップ 100](#)」というのがあるが、その中から 30 個選んで科学技術予測のデータとして 30 枚のカードにして利用する。すなわち、この 30 枚を「問題解決への貢献度（縦軸）」と「技術の実現可能性（横軸）」ということでマッピングする。そうしながらこの技術は本当に社会にどれくらい役に立つだろうみたいなことを議論していく。専門的な内容で中身がわからないものも当然ある。聞いたこともないような技術も出てくる。そのときは私たちの方からサポートを出したり、資料を見せたりするということで理解を深めていく。

日本がかかえる主要な問題

- ①食品の安全性・信頼性
- ②エネルギー自給率
- ③温暖化(気候変動)
- ④農林水産業の衰退
- ⑤有害(化学)物質汚染
- ⑥少子化／高齢化
- ⑦地震災害
- ⑧医療・保健システムの不全
- ⑨生命操作技術(遺伝子操作や生殖医療)
- ⑩情報技術とセキュリティ・プライバシー
- ⑪大規模プラントなど(原発など)の事故
- ⑫廃棄物
- ⑬経済格差／都市と地域の格差
- ⑭ <その他>

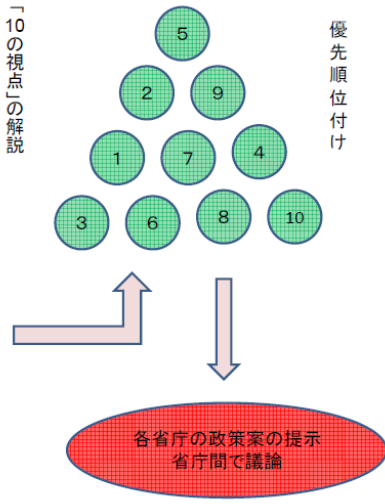
そして最終的に、自分たちの班でこの技術がベストだというのを三つ選んでもらう。なぜその三つを選んだのかということを発表した後に、議論をする。そのときに、先ほど言った「生活者にとっての6つの価値観」のことをちゃんと考慮してくださいと注意を促し、今度いよいよ自分たちで技術を発案しようということになったときに「生活と科学技術の18分類」を使う。

生活者の科学技術との関わりにおける6つの価値観



どういうふうを使うかと言うと、実は、水・大気にかかわる技術を考えてくれといったら比較的易しいが、全然関連が見えないような二つを両方満たすような技術をつくってくれという難しい。難しいけれど、何かアイデアが刺激されるということがある。例えば「衣服」と「情報・通信」、両方にかかわる、

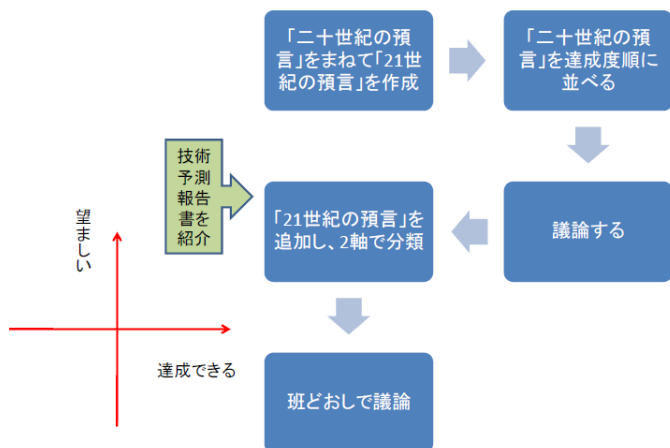
- 「10の視点」の解説
- (1) 産業成長・経済効果
 - (2) 利便性の向上(ユビキタス社会の中核技術)
 - (3) 福祉(コミュニケーションのバリアフリー)
 - (4) 公共性との兼ね合い
(公共空間の私有化、固定電話の減少)
 - (5) 犯罪・事故・安全(電子機器の誤作動などを含む)
 - (6) 通時代による家計圧迫
 - (7) 健康影響
 - (8) 環境負荷(廃棄物問題、希少金属資源など)
 - (9) 若年層に特有の影響
(依存症、有害サイトアクセス、ネット犯罪、いじめ)
 - (10) 基地局(住民合意不在の設置が生むトラブル)



3 ワークショップ「二十一世紀の預言」

それからもう一つ、これは実際に科学技術予測にかかわるもので、「二十一世紀の預言」がある。20 世紀の一番初めの年に、[報知新聞が「二十世紀の預言」](#)というのを出した。そこには、無線電話通信のこととか、空中軍艦のこととか、蚊とかノミの滅亡だとか、いろいろな予測が 23 種類書かれている。非常に内容的におもしろいので、これを何か生かせないかなということで考えたワークショップだ。

やり方は次のとおり。参加者にこの「二十世紀の預言」という昔の報知新聞のコピーを渡して、それをまねて「21 世紀の預言」を書いてもらう。その後、今度は「二十世紀の預言」のさっきの個々の項目を、達成度別に並べてみる。預言がどれくらい当たったか、達成したか、それはなぜなのかを議論してもらいながら。調べてみるとたちどころにわかるが、無線・情報・通信関係はほとんど実現できている。ところが、生物とか生態にかかわることとか、大きな気象のこととかは非常に達成度が低い。そして次に、先ほど NISTEP の資料を紹介したが、その中から代表的な予測事例をいくつか紹介して、現在の科学者たちはこんなふうに将来を予測しているのだというデータを紹介した後に、自分たち自身で、先に行ったものに追加する形でさらに 21 世紀の預言をカードに書いてもらう。それらのカードを、「それが望ましい技術」という縦の軸と「達成できるのか」という横の軸になっているグラフの中に置いてもらう。そうやって自分たちで分類して議論していく。



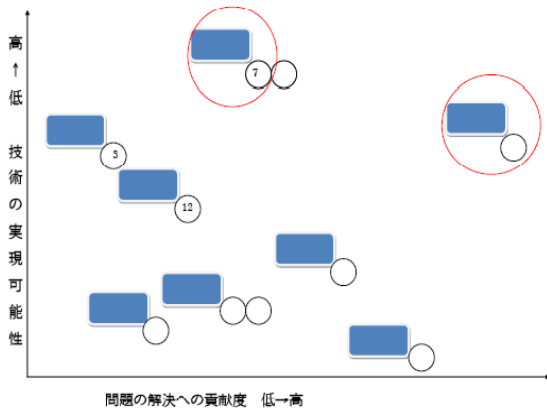
これから日本を元気にする技術を考えてくださいというと、何かちょっと頭が刺激される感じがあるだろう。任意に箱の中からパッと二つ選んで、その2つの両方に関連する技術を考え書いてもらう。そうやってお互い出し合ってまとめていく。これは、非常に面白いアイデアが出てくることが多い。30人ぐらいで2時間ぐらいかかるが、やってみて、びっくりするぐらい、一般の人から奇抜なおもしろいアイデア、そういう発想もあつたかみたいなのが出てくる。

18分野から任意の2つを組み合わせるイノベーション発案

- | | |
|-----------|-------------|
| 水・大気 | 安全・防災 |
| エネルギー | 機械・道具 |
| 食・農林水産 | 情報・通信 |
| 住まい | 交通 |
| 衣服 | 福祉・ケア |
| 廃棄物 | 教育 |
| 材料・化学物質 | コミュニティ・人間関係 |
| 健康・医療 | 身近な自然 |
| 妊娠・出産・子育て | アート・遊び |

30の「重要課題(技術)」を評価する

私のベスト3 → 意見交換(大きな模造紙+コメント付箋) → 班のベスト3



なお、サイエンスアゴラ 2009 において実施した「最新技術から社会を考えるロールプレイ」も以上のような未来技術予測のワークショップの経験をふまえて、よりテクノロジーアセスメントの要素を強く意識して設計されたものだ。

5 「ナノテク未来地図」

最後に、「ナノテク未来地図」(現在、改訂中で 2010 年 1 月に市民科学研究室のホームページで改訂版を公開予定)。これはちょっと性格が違う。基本的な問題として、技術予測において、冒頭に言ったように市民の存在が見えにくい。それから、市民参加、市民参加と言うけれども、そのとき、実際に専門家がどうやってかかわってくれるのかということも見えにくい。何とかいい形でかかわれる、対話していけるようなものが必要だ。そこで、こんな方法もあるかな、と考えてつくった一つの方法だ(◆注1)。

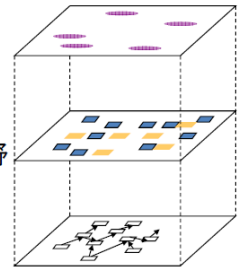
まず、基本的に未来地図といったときに、技術の予測だけではだめだ。(1)将来の社会像と価値観がどんなふうにかかわっているか、そして、(2)それがナノテクの応用分野とどんなふうなところに位置づけられるのか、そして、(3)個々の技術の要素があつて、それがどのようないろいろな社会影響を生んでいくのか、といったシナリオを書かなければいけない。

三層の未来地図

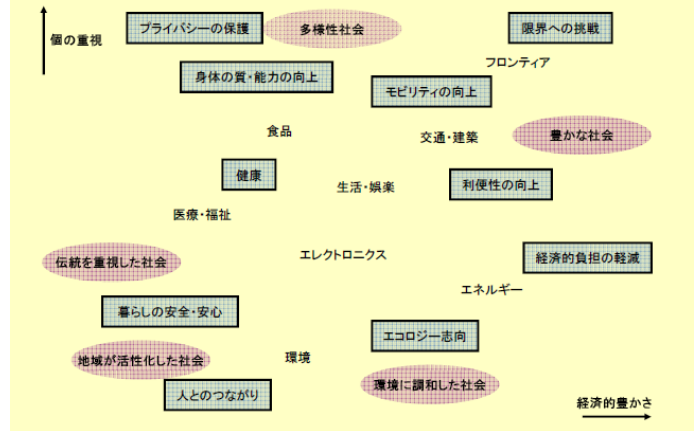
- 将来社会像
どんな社会を目指すのか

- 社会技術マップ
個人的価値とナノテク応用分野

- シナリオマップ
技術・社会イベントの関連図

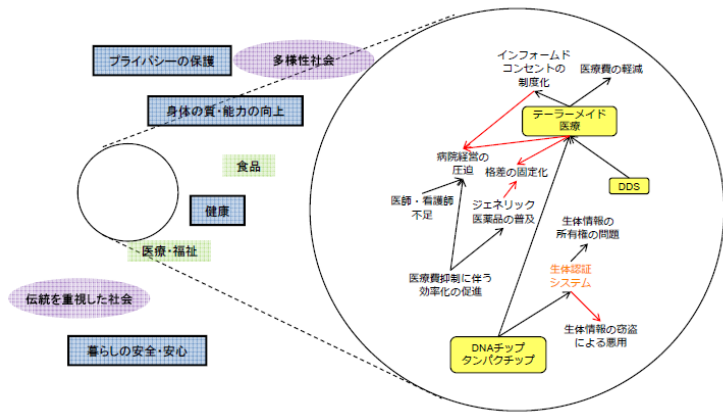


将来社会像と社会技術マップ

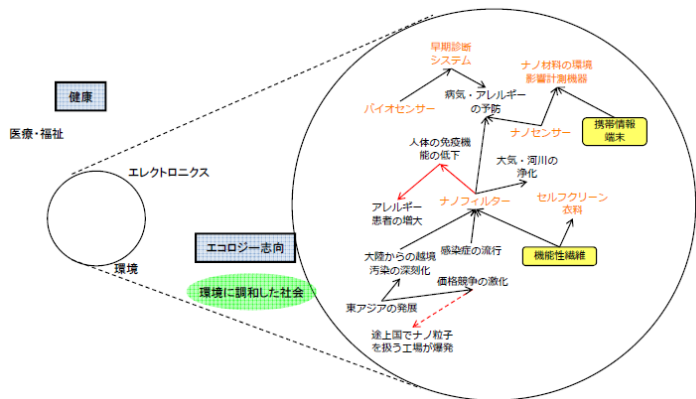


この(1)から(3)の3層構造にしているというのが私たちのマップの特徴だ。実際はこんなふうになる。まず、例えば価値観で言うと、「多様化社会」とか「豊かな社会」とか「環境に調和した社会」、「地域が活性化した社会」、「伝統重視社会」。これは、実は全部いろいろな白書から選んできて、私たちなりに整理したものだ。そして次に、これに関連するようなこれからの価値観の方向性というか、そういうものを当てはめていく。例えばフロンティアの追求、モビリティ、利便性、経済的負担の軽減、エコロジー志向、人とのつながり、暮らしの安全・安心、健康……など。ここにナノテクの分野を当てはめるとナノテク分野は結構広くて、交通とか建築にかかわるものもあれば、医療福祉にかかわるものもあれば環境にかかわるものもあるみたいになってくる。これが一番下地になる層だ。

シナリオとしては、大体 15 年とか 25 年ぐらい先までを想定して、願望を入れるのではなくて、実際に今、言われているいろいろな論文とかいろいろな記事からとってきた予測というのを当てはめていく。シナリオの発展経過を描いて、実際にそれが出てきたら社会にどう影響を及ぼすかということを描き込んでいく。



具体例を述べる。例えば、食品とか医療・福祉にかかわる領域のナノテクだが、その中で、「テラーメイド医療」「ドラッグデリバリーシステム」「DNA チップ」などが実際今、出てきつつある。これに関して、例えばこの斜め上、地図上の上向きの矢印というのは、社会によい影響を及ぼすだろうと想定できるもの。それから、ダメージを与えるのはこの下向きの矢印で描いている。途中で色が変わっているのは、専門家と対話して、あるいはインタビューしたりして、そこで教えてもらったことを追加したり、修正を加えている。そういうことを加えながらどんどん更新していくという、そういうシステムになっている。



情報提供とそれをふまえての対話の促進という面では、例えば、「エネルギー」のところをクリックすると、エレクトロニクスなどの関連する部分がかっきり色分けされて浮き出てきて、地図が見えるようになる。それを見ながら個々の項目をクリックすると、個々の項目ごとの短い解説が現れると同時に、別のページが開いて、自分の意見が書き込めるようになっている。そこへ意見を書き込んで、お互い情報交換をしていくというシステムになっている。この時、書込まれた意見を地図に落とし込んでいくのはファシリテータ（あるいはメディエーター）が担うことにしている（◆注2）。

6 科学技術予測の市民的活用の課題

これらを実践してきて課題として見えてきたことを述べる。一つは、専門家自身にも入ってもらって対話型のワークショップというのを作ることが必要だということ。専門家も言ってみれば一市民だ。だからその立場から入るということも可能ではあるが、専門知を生かしつつも何か市民と直接やり取りできるワークショップというはできないものかと、今考えている。もう一つは、ナノテク未来地図のようなウェブの仕組みというのは、つくる側は大変で、更新にも手間がかかる。これをだ

れでも無料で使えて簡単に更新できるシステムに改変して普及させていきたい、というのがある。ナノテクに限らず。

あとは、例えばテレビ会議のワークショップみたいなことも想定して、遠隔からもリアルタイムの参加を可能にする道具やシステムを打立てていけないか、という気持ちもある。

それから、教育現場でもっと今言ったような未来技術にかかわるようなワークショップなどを活用してほしい。なぜかと言うと、科学技術にそれほど関心のない人でも、将来こうなるよと言われたら、それに対して急に目を向けたりするからだ。そのためにはワークショップの手法に対して理解を深めなければいけないので、研修をしたりとか、例えば携帯電話のことでふれたが、基礎となるデータとか解説をパッケージ化して提供するとか、そのようなものも必要かと思う。

あとは、信頼度が高く利用しやすい、未来技術に関するデータベースを、やはり持つておく必要があるだろうということ。生活者の視点を入れた構造化は、これからの課題だが、様々な領域の専門家の協力も得て、私たちのような NPO が主体となってもっとすすめていかねばならないと思う。■

注1◆ 具体的な例で言うと、ナノテクで例えば新しいタイプの健康食品ができたとする。ある人たちにとっては非常にいいということになったとする。例えばそれをイベントとして未来地図の中に書き込んだとする。しかし実は、専門家によってもそのことへの評価が分かれたりする。そこで、まず意見の書き込み欄に書いてもらう。これをいきなり地図に反映させるのではなくて、ここはすごく難しいところだが、いわばこの中間にファシリテーターみたいな存在が介在させるようにする。つまり、いろいろな相矛盾する対立するような意見が出た場合に、どういうふうこれを反映させたいかということはかなり難しい問題だったりするので、そういうときには専門家と相談しながら、こういうのはどうですかということで一応暫定案として、実は私たち（市民科学研究室）が作る。そしてそれを地図に書込む。さらに一般の人もそれに対してまた反応するという形をとる。そういうことを繰り返していく形をとっている。

注2◆ たとえば原子力のように既存の技術ですでに推進と反対の立場の対立が引続いているような問題に対しては、このようなアプローチでは“対話”を引出すことは難しいと思われる。ナノテクの場合、これはあくまで未来地図であり、これから出てくるだろう技術に関して予測を立てて、それに対して評価を加えていくというやり方だ。原子力にみるような対立を解きほぐす道具としては、「未来地図」的アプローチは成り立ち得ないというふうには、基本的には私は考えている。また別のやり方が必要だろう。

【本稿は 2009 年 6 月 20 日立教大学池袋キャンパス 10 号館で行われた「新日本未来学会第 2 回未来学フォーラム」での上田昌文の発表を加筆・修正したものです】



ワークショップの場面から
(東京工業大学にて、2004 年)



今号の記事論文から

市民科学研究室が毎月提供する記事・論文はすべて、どなたでもホームページからダウンロードできるようにしています。今月は4本を掲載します。

まず、7月に行った市民科学講座「子どもを産むという選択～現代日本の未妊・不妊・高齢出産事情～」の記録を39ページでお届けします。河合蘭さん（出産ライター）を講師に招いての講演と参加者との質疑応答の2時間半が詳細に起されています。この記録の冒頭で述べたように、現在市民科学研究室では特に若い女性を対象にした生殖医療に関する書物をまとめようとしています。2010年には発刊できるようにしたいと思っています。

次は五島綾子さん（サイエンスライター、元静岡県立大学教授）の連載「科学技術コミュニケーションを問う」の第7回目「ナノテクノロジーの光と影—その1—伝わらないナノテクノロジー」です。五島さんが監修なさった翻訳書『ナノハイブ』（みすず書房 2009）と同様の視点から、日本のナノテク研究開発をめぐる科学コミュニケーション上の問題点を指摘しています。

同じくナノテクに関して、そのリスク面で最近明らかになった重要な事実の紹介をふまえて、日本でのナノテクリスク管理のあり方に問題提起をした論文「ナノマテリアルのリスク評価—現状と課題」を、小林剛さん（東京理科大学ナノ粒子健康科学研究センター 環境医学情報センター (EMIC)) にご寄稿いただきました。

桑垣豊さん（近未来生活研究所）の「長崎原爆 投下の経過を再構成する」は、7月20日に低線量被曝研究会の公開学習会として行った内容を原稿にまとめたものです。事実を冷静に掘り起し比較検討しながら、長崎原爆の投下の経緯を再構成する作業は、本来なら歴史家がなすべきはずのものです。桑垣さんは自身の興味から長い時間をかけて、この作業をすすめました。この論文からはその情熱が伝わってくるはずですよ。

市民研 この先のイベント

詳しくは同封チラシ、ホームページをご覧ください。

●子ども料理科学教室

◆11月15日（日）午前10時半～午後1時

「土鍋でお米をおいしく炊く秘訣」

場所：文京区立駒本小学校

主催：わくわく子どもクラブ

参加費：500円（子ども一人につき）

定員：20名（小学校1年生～中学3年生、保護者の参加が必要）

●11月29日（日）、12月12日（日）

スライド・トーク

「中古民家主義へのお誘い」

場所：市民科学研究室事務所

講師：眞鍋じゅんこ and 鴫田康則

年末の市民研事務所移転に先立って、天神山オフィスお別れ企画です

●12月26日（日）午後2時～8時半

クリスマス・パーティー 2009

第1部 料理講習会（午後2時～）

市民科学研究室メンバーから、一級の腕前を持つ4人の講師が登場！料理作りを学びながら、参加者全員でパーティー料理を作ります。

料理実習費：無料（定員20名）

第2部 クリスマス・パーティー（午後5時半～）

今年も楽しいイベントを用意しています。名刺など自己紹介できるものをお持ちください。（定員50名）

参加費用：3000円（小学生以下1500円）

+できれば、差し入れ1品

☆講習会・パーティーとも予約をお願いします

お子さん、ご夫婦、お友達……どなたでも歓迎です！

緊急連絡！ 市民科学研究室の事務所が移転します！

2003年から現在いる文京区本郷6丁目の古い民家（築百年以上）の一室を間借していましたが、大家さんの意向で取壊しが決まりました。12月末までに移転しなければならなくなり、焦りましたが、幸い、同じ文京区の地下鉄千代田線「千駄木」駅の近く（徒歩1分）のところに、かなり広い部屋を間借りできることになりました。住所そのほかは引越しが終わった時点で会員の方々へはもちろん、ホームページなどにて広くお知らせする予定です。引越しの日時は現在検討中です。

そこで皆様をお願いします。

★年末に行う引越しを手伝っていただける方はいらっしゃいますか？

★トラックを運転しての数回の往復（東大正門近く～千駄木駅近く）ができる方はいらっしゃいますか？

もちろん、交通費・アルバイト料などはお出しします。12月7日（月）に行われる理事会にて詳細を決めますので、それまでに、手伝っていただけそうな方は、ぜひ市民科学研究室（03—38160—0574）にご連絡いただければありがたいです。どうかよろしくをお願いします。